

HIV 感染症は治療の進歩により慢性疾患と位置づけられるようになった。また、HIV 感染症は早期発見ができれば、AIDS 発症せずに外来通院で対応でき、HIV 感染判明以前とさほど変わらない日常生活を送ることが可能である。しかし、感染告知を受けた患者・家族が抱く HIV のイメージは、昔のまま死の病であることが多い。HIV 感染症に対する偏見や差別はいまだに社会に根強く、HIV 感染判明による影響は身体機能や心理状態のみならず、社会生活にも及ぶことがある。

看護師は患者や家族に疾患や治療に関する正確な情報を提供し、十分な理解のもとに病を抱えた生活が送れるよう支援を行う。

長期療養生活において患者が健康管理に必要なセルフケア行動を実践できるよう、個別性のある支援が重要である。看護師は患者の情報の集約を行い、必要な支援について各専門職や医療チームが協働するための調整役を担う。

(1) HIV 陽性者の看護

HIV 陽性者の看護は、患者が日常生活と治療を両立できるよう、セルフケア支援を実施することである。また、患者が QOL を維持しながら自己のライフスタイルを構築していけるよう、治療や日常生活に関することを患者が選択し自己決定できる支援を行うことである。そのため看護師は、患者の身体的・心理的・社会的背景を総合的に把握する必要がある。HIV 陽性者の看護のポイントを下記に示す。

- ①感染告知に伴うショックや動揺などの危機状態への支援
- ②服薬管理、合併症予防への支援
- ③長期療養に伴うセルフケアマネジメントへの支援
- ④セクシュアルヘルスへの支援
- ⑤在宅療養支援